郷土はんのう

第14号

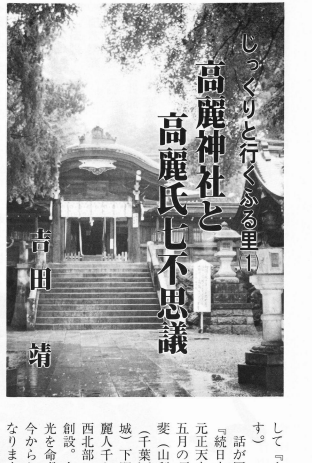


素朴な器形、渋く柔らかな色調、
練達の絵付け、薄手のロクロと飯能焼を語るが、
幻陶として歴史の中に埋没させてはなるまい……。

新特集

── 知りたい ふる里 ──

友人をつれてきてびっくりさせる
ふる里はいかがですか。
出かけたくなる飯能の紹介です。



高句麗渡来人の集結と高麗郡の創設

今回のお話のテーマは「高麗神社の歴史」ということになっておりますが、高麗神社についてはこれまで数多くの方々が語り、かつまた皆さんご自身も二度や三度訪ねておられますので、大方のことは判っておられる。そこで、今日は高麗氏が何代にわたって高麗郡長を勤めたのか、そうした疑問点など「高麗家七不思議」を中心に取り上げてみたいと考えます。

幸いと申しますか、高麗神社については、これまで多くが語られてきましたが、七不思議といったテーマで語られたものは、私の浅い知識で知る限り、これまであまり無かったように思うからであります。

さて、高麗神社について語るとなれば、なにはともあれ「高麗郡」の創設に触れないわけにはいきません。そこで古代歴史書である『日本書紀』などにおいて世話になることになります。

日本書紀は神代から大和時代（持統天皇）までの神話や伝説、記録を収録、太安万侶等により奈良時代に編纂されたもので、わが国では最古の歴史書とされています。（同書が正しい意味での歴史書といえるかどうか疑問とする声もありますが）

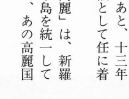
その後の百年間、すなわち奈良時代の歴史書が『続日本紀』。さらにその後、平安時代になって編纂されたものが『続日本後紀』となります。このほか、『日本後紀』『文徳実録』『三代実録』の六つの記録誌を総称して「六国史」と言っております。

話が固くなりましたが、その『続日本紀』の中の〝巻七〟の元正天皇・霊亀二年（七一六）五月の項に、「駿河（静岡）甲斐（山梨）相模（神奈川）上総（千葉）下総（千葉）常陸（茨城）下野（栃木）の七ヶ国の高麗人千七百九十九人を武蔵国の西北部に移住せしめ、高麗郡を創設。大領（郡長）に高麗王若光を命ず」と書かれています。今からおよそ千二百八十年前になります。

高麗郡の郡域は本拠の日高全域と吾野を除く飯能全域、入間市元加治地区、狭山市水富・柏原両地区、鶴ヶ島全市、川越の霞ヶ関・各細両地区でしたが、当時、このあたりは未開の地であったらしい。そのことは次のような古歌からも察することができると思います。

分けゆけど
　花の千草のはてもなし
　秋をかぎりの武蔵野の原

出つるにも
入るにも同じ武蔵野の
尾花を分くる秋の夜の月



その武蔵野の一角に焼物、製鉄、近代農業など大陸文化が持ちこまれ、開拓の推進など状況は大きく変容します。かつて高麗の郷を訪ねた早稲田大学教授で、万葉研究家としても知られる国文学者・五十嵐力氏は当時に思いを馳せ、こんな一首を詠んでいます。

高麗の〜こま〜
若き光りの導きに
むさし野はひらけそめけむ

若光王、その人とその故郷、高句麗

高麗若光の名が歴史に残る最初のものは『日本書紀』天智天皇五年（六六六）の条に「冬十月、高麗の大使来る。副使達相楯、二位玄武・若光を同行」とあります。このなかの若光が後の高麗王と見られますが、今日の段階ではっきりとは断定されていません。

その後、『続日本紀』の文武天皇大宝三年（七〇三）の条に、「従五位の下、高麗若光に王（こきし）の姓（かばね）を賜う」とある。これは間違いなく高麗若光王のこと。

王の姓を賜ったあと、十三年目に高麗郡の大領として任に着いたわけです。

ここで言う「高麗」は、新羅の滅亡後、朝鮮半島を統一して開城に都を築いた、あの高麗国ではありません。

紀元前、町花江上流に興った武士団が朝鮮の北半分を領有、平城に都を開いた古代の強大な国家、高句麗（こうくり）のこと。高句麗は七百年にわたって栄えましたが、天智天皇のころ（六六八）唐と新羅の連合軍に破れ、多くの王族などがわが国に逃れて来た。これが一般的に高句麗人と呼ばれているわけですが、これにより大陸の進んだ文化が多く持ち込まれたのであります。

若光王の死後、高麗郡の住民は王の遺徳を偲んで高麗神社を建立、王が白い髭を生やしていたことから、人々は同社を白髭明神とか高麗明神といって崇めたと伝えられています。また同種の神社が郡内各地に建設されたことはご承知のとおりです。

しかし、高麗神社の創建され





た年号記録は正元元年（鎌倉中期）第二十八代永純の時の火災で数々の資料が焼失、現在は、はっきりしておりません。

解明したい高麗氏「七つの不思議」

①　都長在任の期間

高麗王が高麗郡の大領、長として焼物、製鉄、農耕などに大いに活躍したことは、日和田山東部の高麗窯から出土した分寺屋根瓦からも充分察しがつくのですが、しからば高麗氏が何代にわたって高麗郡の大領を勤めたのか、その点、今は謎に包まれています。若光王一代で終わってしまったのか、それとも数代続いたものか、日高市市史編纂室でも、その点の資料探しを行ったそうですが、いまって見つかっていないようです。

今後の資料発見に期待したいと思います。

②　若光王の館と墓

高麗王家の館は神社の裏山山頂の一角というのが定説ですが、今のところ確たる資料は出ていません。高麗本郷が館とする説などは幾つかありますが、それらはいずれも伝説との混同も見られ根拠が薄いようです。それにしても高麗若光王クラスの人物が居住したところさえはっきりしなくなる……年月の不思議を感じないわけにはいきません。その王の住居地、館跡もさりながら、問題は若光王の墓です。聖天院前の高麗王廟が一般的には墓とされていますが、専門家の意見によりますと、あれは鎌倉時代に建立された供養塔であり埋葬地は別、とされています。しからばどこか。筆者も新井清寿氏（元郷土史研究会長）健在のうち、氏とともに高麗の郷を探訪しました折も結局、高麗家の墓地内（裏山山頂）が正しいと考えられるようになりました。

しかし、そこには五輪塔はおろか、歴代高麗氏の墓は子供の頭大の平凡な石ころが並ぶだけでした。

「決して立身出世を夢みたり豪壮な墓など建ててはならん」という高句麗精神、若光王精神がここにも伺えるのであります。それにしても、高麗王墓が石ころ一つとは……。

③　神官が僧に変身

高麗神社は文字どおり創建当時の大昔から神社。ところが明治の排仏会までは神社の前で祝詞ならぬお経を読んでいたのであります。

もともと高麗神社は、白髭明神とか大宮明神とか呼ばれたことでも明らかなように、神社だったのです。高麗家十四代の一豊の時代には「高麗明神大宮号」を許されてもおります。

ところが二十三代「麗純」は行方の折代により山伏となり、名も「高麗寺麗純」と改めてしまいます。以後代々、名前も多門房行仙とか清乗院良多というよう、坊さんの名に変ってしまうわけです。

当時は神仏こんこうの時代、とはいえ高麗氏の宗家たる者、そう簡単に宗旨を変えられるものだろうか。何がそうさせたのか、これまた不思議と言うほかありません。

④　高麗神社の三祭神

高麗神社は前述のように若光王の徳を永久に讃えようと社殿を建立、祭ったもの。したがって主神は当然若光王のみでよいはず。ところが、現在の主神は若光王とともに猿田彦命と武内宿禰の三神なのです。しかも何時そうなったのか、始めからか、途中からか。途中であるとすればいつからか、そこらが全く分からない。資料によっては「若光王が不断から祭いでいた二神を併せ祀った」と記しているものもありますが、高句麗人若光王が日本の伝承的・神話的な人物を崇拝していたというのも、考えてみるとおかしなことではないでしょうか。

⑤　倭人と同化せず

高麗若光王以来、高麗家には婚姻は同族、重臣を以て行う、との家訓があったそうです。倭人（日本人）と結ばれてはならぬとのうのです。一般の高句麗人は「新井」とか「駒井」「新」などと改名しているのに、高麗氏はなぜ日本人との同化をすすめなかったのか。これは今もって不思議とされています。筆者の独断と偏見によりますと、一にも二にも高句麗国再建への戦いが始まった場合、祖国に帰る決意が秘められていたとみるべきではないでしょうか。それとも、いつ果てるとなく続く日本国内の争いに巻き込まれるのを避けるためだったのか。いずれにしても王の高潔さからいって、文化の遅れた在来人をさげすんでのことではない、ことは確かだろうと思います。

ところが、その〝倭人と同化せず〟の固い家訓が、途中でなぜ崩れ、二十七代豊純の時代（鎌倉後期）に源氏系統の者と血縁関係を結ぶことになったのか。その経緯も不思議です。豊純時代以来、倭人との結婚が進行、このため鎌倉・室町時代の戦乱に巻きこまれ、高麗左衛門介高広、高麗兵庫介則長等々、多数の高麗氏系統が各地に由来、その多くが討ち死にするという悲惨を味わうことになったのであります。

⑥　源家道晩とその娘

ここにもう一つの不思議が入り込みます。それは高麗氏家系図第二十七代に「深い子細あって駿河国岩木　僧都道晩女を室として迎える」とある個所。

同神社の社伝とも言える『高麗神社と高麗郷』には「道晩なる者、詳らかならず」と記されており、道晩とはいかなる人物か、不詳とされている点です。

私も長い間、そこにひっかか

っていました。わざわざ静岡からお嫁さんを迎えようというのに、どこの誰か分からない家から……というのもおかしな話。

ところが先日、飯能郷土史研究会の高麗神社歴訪のさい、高麗敏江夫人から「牛若丸（義経の幼名）の兄、今若丸の子が道暁。その娘（今若丸の孫娘）が嫁として高麗家に来られました」と説明されました。これは大ニュースです。

敏江夫人は続けて「家系図のなかに『駿河岩本』とありますが、静岡には岩本という所はなく、岩本ではないかと思われます」とも語られました。

今若丸三兄弟といえば、平治の乱に破れ殺された源義朝と常盤御前との間に生まれた長子・今若丸（全成）、二子・乙若丸（義円）、三子牛若丸（義経）で、源頼朝の異母兄弟であったわけです。

ただし、僧・道暁なる者、何者であったのかはこれまで不明とされてきたのです。

それが、実は今若丸の子であることを突き止めたのは坂戸市の市史編集委員会です。これについては平成五年十二月五日付け"文化新聞"で報道したとおりであります。

したがって七不思議の一つが消えた、と言うことができます。が、家系図に記されている「深い子細あって」とは何か。この点はまだ？マークのままです。これまで大和人と結ばずにきたが、深い子細があって源家の縁者と結婚することになった、その「深い子細」とは何か。そこが知りたいのですが……。

⑦ 家系図が他家へ

ここで家系図を見ると、二十七代永純の時代（正元元年十一月八日＝鎌倉後期）の火災のさい家系図も焼け、一族郎党相寄り、資料や言い伝えにより苦心惨憺の末、家系図を作成しなおしたとあります。現在、文化財に指定されている家系図はその際、再生されたものです。火災という避けられない不幸ではありましたが、苦心の末、ほぼ正確な家系図をやっとの思いで作成した。痛いご教訓から、「家系図は絶対守らなければならない」高麗氏一族はそう堅く誓っていたはずです。ところが、その家系図が四十七代賢光の時代（元禄七年）、勝呂村（現坂戸市内）の旧家勝呂家に預けられてしまいます。

これも不思議といえば不思議。家系図などというもの、本来は門外不出であるはず。それがなぜ他家に？……。

その理由について『高麗神社と高麗郷』誌は「故あって」と消極的に記しています。そして、明治七年に返還されるまで十代にわたって勝呂家に預けられた

「かみや」さんのふる里(2)

飯能の和紙生産

飯能市郷土館長　浅見徳男

「飯能が和紙の生産地であった」というと、大方の人は疑問を抱かれる。無理もないことで、とうのむかしに廃絶してしまって、今では「かみや」という屋号が残るだけになってしまっている。

江戸時代のはじめから大正時代まで、主に飯能の山間部、

飯能町			小川町		
村名	紙舟役		村名	紙舟役	
唐竹村	貫九四三文		腰越村	五貫四〇〇文	
日影村	九八三八		青山村	一三〇〇	
苅生村	二一八		上古寺村	七五〇	
長田村	一四七		下古寺村	三〇〇	
白子村	一四三		角山村	二五〇	
上吾野村	六二一一		下里村	一五〇	
下吾野村	九三七三		笠原村	八五〇	
計	二六貫八七三文		笠原村分	一貫〇〇〇文	
			計	一〇貫〇〇〇文	

小川というえば和紙。和紙といえば小川を連想するほど、現在の小川町は和紙の生産地として有名であり、埼玉県の伝統工芸品として指定もされている。しかし、江戸時代初期には、現在の飯能市域も和紙の一大生産地であり、小川町を凌ぐほどであったことがわかる。

和紙の生産技術そのものは、江戸時代以前から、この地方にあったのであろうが、徳川家康が江戸に入って、やがて幕府を開くことになった慶長時代以降になると、和紙に限らず、あらゆる生活物資の需要は、急激に増大することになる。いわゆる地廻り経済圏といわれる江戸を中心とした、今でいう首都圏五～六十キロメートルの範囲は、大消費地の江戸へ物資を供給する生産基地であった。

そのように政治・社会的な変化の中で、飯能地方もその影響を大きくうけたのであろうが現在でも市域の七割方が山林という地形の条件や畑作地帯であることから、自然と生業にも限りがある。山林に依存した生活を送らざるを得ない中で、自然林の伐出、薪や炭の生産、わずかな畑地の開墾と、そのほか養蚕、茶、織物など、時代はほど異なるものの特殊な産品としては石灰、陶器などにも記録にでてくる。

その中に紙漉きもあるが、記録の上ではこれらの生産は農間余業と位置づけられ、あくまでも農業が主で、他は余業である。ところが紙生産の工程をみていくと、とても余業などといえるものではなく、家族総出で作業をしなければ、とても生産できるものではないことがわかる。原料である楮や三椏の育成、伐採からはじまって、紙漉き、乾燥に至るまで、じつに多くの作業があり、とても一人や二人でこなせるものではない。



ままでした。
勝呂家とは姻戚関係にありましたが、だからといって家系図まで持って行くというのは理解に苦しみます。借財の形とも考えられますが、高麗家ではその点は否定しており、「信教上の都合だったのでは」としています。その理由、もう少しすっきりさせたいものです。
以上が私の見た高麗氏の七不思議ですが、今若丸の孫娘が嫁いできたことが判明したように、これら七不思議が次々解明されることを心から期待したいと思います。



参拝者から偲ばれる 高麗神社の格式

さて、高麗神社が人々からどれほど敬われているか、その尺度は、参拝人の記帳から偲ぶことができます。次に何人かを挙げてみますと……。
尾崎紅葉、徳富蘇峰、岡本一平（画家）、幸田露伴、長谷川伸、平山蘆江、秋田雨雀、富安風生（俳人）、太宰治、今日出海、円地文子、坂口安吾、檀一雄、佐藤春夫・千代子夫妻、阿部能成学習院長、壺井栄、柏谷義三、公爵徳川慶光、歴代知事、歴代各大臣、五十嵐力夫妻、蔵原伸二郎、打木村治ほか。

【むすび】

高麗王若光、そして先人高句麗各氏は、いまなお多くの旧・高麗郡民の誇りであります。
私たち、少しでも郷土の歴史を知ろうと心掛けるものにとっては、いつまでもこの歴史の灯を守り続けたいものです。すくなくとも人種的偏見によって、高麗の歴史がついえ去るといったことのないよう切望してやみません。
温故知新（ふるきを尋ねて新しきを知る）のために。

―飯能郷土史研究会
（平成五年十二月十一日）
卓話より―

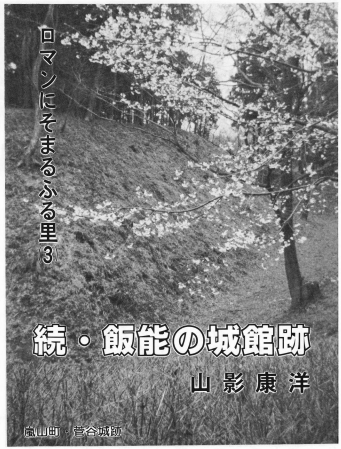
そこで、家族全員がそれぞれの工程で協力し合って進めなくては、できない仕事である。しかも、前述のように紙舟には貢租を納めなくてはならないので、ある程度の資本も必要であった。
一方で需要があり、また一方で技術がある中で、資本を提供しようという江戸商人の動きはごく自然のことであるが、日高市の堀口家文書（天和三―一六八三年）には、高麗郡、多摩郡、比企郡の紙漉家に、資本を提供しようという内容のものもある。
また、上赤工村や下赤工村では、紙漉きの資本金とするために、それぞれ三十八両、三十二両の借入金をしたいとの文書もある。
このように資本を得た紙漉家は、余業と記録されても専業化していったのであろう。
別表では、飯能の七ヵ村で紙を生産していたことになるが、江戸時代を通じて紙漉きに関係する記録をみていくとじつに十七ヵ村を数えることができる。このように盛んであった飯能の和紙生産がどうして絶えてしまったのであろうか。
江戸時代は米中心の経済であったが、中期以降になると商品貨幣経済が地方にも浸透し、それとともに流通経路も確立されてくる。生産者―仲買人―卸問屋―問屋―小売―消費者というルートを経ていくが、これは、たえず幕府の看視の下にあった。とくに、江戸十組問屋による文化十三年（一八一六）の武州紙の押収による値段の下落などの流通面で困難を生じたことが、やめてしまった第一の原因であったかも知れない。
また、ひとつにはその難関を乗り切らなくても、飯能地方にはそれに変わる林業があったことも、身過ぎに支障が生じなかったのではなかろうか。小川では再三の訴訟をおこし、その困難を乗り切っている。
飯能地方の和紙生産は、幕末にはすでに衰退の一途をたどっていたようであるが、最末期は大正時代のようである。
明治時代に漉かれたという吾野地域の和紙をみると、紙質も悪く、すでにこの時代には技術的にも衰亡寸前という感じがするが、ある時代には地域経済を支えてきたと思うと、飯能の紙生産にある種の感慨を覚えるのである。



▼二月定例会より　手漉き和紙を作る！

去る二月二十七日に開催された定例研修会で、〝小川和紙〟の制作者久保晴男氏の実技指導のもと、一人ひとりの名入りの和紙を漉いていただいた。
そのたくみな手さばきに、手漉き和紙の出来るまでの作業工程を勉強した。これは、郷土史研ならではの貴重な体験でしたが、紙が沢らんする時代、大切にしたいものです。（K）
◆二月定例会の掲載写真は、平成六年三月二日付〝文化新聞〟より転載いたしました。





序

昨年に引続き、今年も飯能の中世城館跡について執筆させて頂く。今回は個々の城館を解説するのではなく、なるべく読者に実態を知ってもらえるように項目を設け、市内周辺の遺構を引例する形をとった。

なお、昨年の文章で筆者の明らかな誤りや、その後の新事実の発見もあったが、紙面の都合上、別の機会に譲りたい。

(1) 城の形態

市内には山城が多い。これは山地が多いから当然だが、特に中世においては山城は防衛、監視の機能が高く、最少限の工事費用で構築できる利点があるからだ。そのため技術が発達し、大規模な城下町（中世には特に総構といって城下全体を城としたものが多い）を領有でき、支配体制の集中を図った江戸時代は、山城はごく僅かになった。

これに対し、中世の山城は利点は多くても、居住には不便なので、工夫が施され、山上は要害として本格的城郭、山麓は根小屋（寝小屋の意、現在も平城跡も含め各地にねごやの地名が残る）を設けた。平城の総構に対し、根小屋式城郭は全国に分布し、国史跡八王子城も戦国最末期には珍しく（未期頃から平地へと移るようになる。滝山城は落ちるに通じるから縁起が悪いので八王子城へ移ったというのは俗説）根小屋式城郭である。

市内では大河原の竜涯山城、小瀬戸岡部氏館（殿山・下段写真参照）などがこの部類に入る。子細にいえば竜涯山は二ヵ所に出城を設けた下に、居館（字殿屋敷の所）を置いた型、殿山は平地の居館（現飯能二小体育館あたりに土塁状遺構があったという）、背後山上に平坦地三ヵ所を設け、屋根を堀切で分断した簡単な城を置いた型である。

だが、山城がみな根小屋式とは限らず、むしろ原市場にある竜崖山城のような、山上だけの城の方が断然多い。竜崖山は連絡、監視のための城で、個人の居城として機能していなかったようだ。一方、精明地区各館跡のように、全くの平城が集中している所もあり、これは開発領主として地域の開墾、支配のために平地に築城、または当初から平地に居住していたので平城になったものもある。

中山の県旧跡中山氏館、山手町（観音寺裏）伝判乃氏館、東町（玉宝寺周辺）加治氏館―などもほぼ消滅―なども平城に含まれる。

また一方で、城館とは違う機能を持つ

①狼煙台
②陣城（臨時の陣地）
③自然地形に近いもの
④威圧（見せかけだけ）

なども存在する。通信手段の未熟な時代、遠方への連絡は狼煙か鐘や大鼓の音に頼るしかなかった。

そこで

①のように場所を設けて常時連絡をとりあったわけだが、現在、北川と下直竹、中沢に鐘撞堂跡といわれる所があり、これこそ連絡地点だったかもしれない（寺社跡の可能性もあるが）。また原市場、上直竹境の山王峠には雨乞場跡という山頂の平坦地がある。これは推測だが狼煙台を誤伝したか、後世、雨乞に利用した可能性がある。後北条氏は小田原本城から約四キロおきに連絡網を、城館や山上、寺社等種々利用して配置しているので、位置的に竜崖山からの中継点とみてもおかしくない。



ここなら南高麗から青梅、原市場から旧飯能方面どちらへも伝えることができる。もちろん、殿山やその間の山頂等も利用されたろう。（附：小岩井大平山には「のろし場」という所も伝えられている）

次に、②の陣城は戦時の臨時の陣地だが、対戦、攻城等で使い分けられる。詳細は未調査だが、享禄三年（一五三〇）一月、

北条氏綱勢と扇谷上杉朝興勢が吉野蛇坂で戦ったという伝承がある。記録類によれば、当時（享禄～天文年間）名栗から吉野方面は上杉勢の拠点の一つだったようだ。当然、城や陣城の防備があったはずで、偶発的な戦いでなければ簡単な構えを設けていたと思う。だから、蛇坂周辺に削平地や切岸（斜面を垂直状に削った城壁）、空堀などが存在してもよいはずだ。

また、坂元から南川にかけて本陣山他、本陣のつ入九号の道は、台と久保地区で歳風土記稿」（新記）「飯能郷土史」（飯史）「飯能市史資料編Ⅻ地名・姓氏」（地名）を参考にした。

①「城」（しろ・じょう）大抵は城跡だが、白、丈などの字があらわれている場合もある。

なお、「要害」は城そのものを指し、大河原、原市場のように「ようがい」「ようげん」などと転訛している場合も多い。阿須城（現陵大の地・消滅）には要害の名がある。

②「殿」（との）でんとは言わず、領主を指すのだろう。大河原殿屋敷、小瀬戸殿山がある。南川戸ノ入は「地名」では西川戸・入ノ解釈しているが誤りで殿入とも書いて昔、侍の屋敷があったと伝えられている。殿林が長沢にある。

③「屋敷」（やしき）「新記」に所載される中屋敷が赤沢、坂石町分にある。共に根小屋的性格のものの跡らしい）屋号や小字で、○○屋敷という所は非常に多い。だが、ほとんどが集落や大尽とされる住宅を指すので要注意。信濃屋敷とか官名が付いている場合は館跡が考えられる。

④「堀（ほり）」ほりのうち、は中山、飯能、青木、永田等、多くみられ、「飯史」「地名」も館跡としており、他に馬場、屋敷などの地名が隣接している場合は、城跡とも考えられる。

近年確認された、五日市町伊奈の「城の腰」（円福寺のある所に僅かながら遺構が残る小城だが、南北から見おろせる余り要害性のない所である。そこで、地形を考えると高麗川沿いの現二九九号の道は、台と久保地区で飯能、川越方面へと別れる重要地点であるので、岡城で監視・威圧したのではない。本格的な戦いになったら、後方の高所に籠れば、なんとか助かりそうだ。そして土豪（岡上氏、英隆、秀景などが知られる）に守備（元は岡上氏の館だったろうが）させていたのではないかと筆者は考えている。

(2) 地名と伝承

城跡には少なから寸関連する地名や伝承が残されている。これは城郭史研究に重要な資料となるものも多いが、地方の小城で著名な人物が登場したり、よく聞かれる落城伝説が伝えられているときは、余りあてにならない。

ここでは市内の城郭、地名を挙げて、その真偽や伝承について考察したい。なお、「新編武だが、開墾された意の「墾（はり）の内」の転や、川に囲まれた半島状台地を、単に堀の内という場合も多いので注意。「飯史」では山手町丸氏館辺を「後堀」＝御城堀としているが、こじつけのようだ。

なお、市内に多くある「うち」で、地名を当然のように討出＝太手＝館跡とつけかもしれないが、これもこじつけかもしれない。城郭地名としてはどこにでもある訳でなく、他の意が含まれているかもしれない。

またよく堀ノ内地名付近に「道場」という所がある。これは郭を意味する「外城」（とじょう・とうじょう）の転訛と考える。一見、城に関係なさそうなものもあることに注意されたい。

⑤「垣内」（かいと）堀や塀に囲まれた館、集落を指すことが多い。○○谷戸、などに転じていることがあるので谷津でない所にも「かいと」という所があったら要注意。市内は谷津が多いので特定できない。

⑥「馬場」（ばば）・「的場」（まとば＝松葉）・鍛冶○○などと、武士が使ったという伝承がなければ、神社に付随する場所であり、単なるかいやの所かもしれない。但し、市内は加治氏が多く居住していたから、これに関連するかもしれない。

⑦「陣」（じん）坂石に前述の本陣山、本陣平、阿須に陣峯があり、共に城跡が存在する。陣城跡かもしれない。

⑧城ゆらしくない地名。山下が「城・山・南」原市場などにある。竹ノ上の下の意で各地にある。竹ノ上が高山にあり、屋の転とも思われるが、「館」の転訛であることが実に多い。その他、一の木・木戸なども城門（木戸）を指しているときもある。

このような転訛したものや、城郭地名でなくても、武士や戦いの伝承があれば、大いに研究してみる価値がある。

以上、市内他、中世城郭については枚挙にいとまがないのでこれで打ち切るが、百聞は一見にしかず、で別紙に原市場竜屋山城を筆者なりに復原図を製作してみたので参照されたい。


八王子城・御主殿復原石垣

特寄

飯能での藍染展を終え
――地獄建てにこだわる谷原　博さんの話――

別稿

武蔵野美大の頃、谷原さんは彫刻を学び、しばらくは東京に留まって美大の資料館に勤めるかたわら絵を描き、彫刻作品を制作しながら、民族学への興味を深めていった。そんな中で民芸運動を知り、深く学ぶにつれ、そのものを創る姿勢に共感を覚えていった。

陶芸をやる友人が、陶土のいい瑞浪（岐阜県）へ移住するを契機に、谷原さんも彫刻にあった土に惹かれるように岐阜県に居を移すことにした。

それが今から二〇年前、まさに脱都会ブームの魁である。

以前から布が好きで、アジアやアフリカの布を収集していた谷原さんが、瑞浪の地で藍染を始めたのは一〇年前のこと。機を織る奥さんの糸を染めるため、藍甕を持ったのが始まりだったという。それも自然発酵建て、地獄建て にこだわって藍染作品を制作している。

古い農家を改造したという仕事場の玄関ののれんをくぐると、右手に四つの藍甕が佇む。藍と一つ屋根の下に住んでいるから、しょっ中のぞけて管理がしやすい、と谷原さんは答える。

「四つの藍甕は人の人生と同じです。幼いうちにすぐ死んでしまうものもあれば、順調に育ってやがては老い、死んでいくものもあります。老人には老人の枯れて明るい、しかも力強い色があります……」

◆自然と日本人と藍染

自然破壊が進み、水も木も、昔日の清らかさを失いつつあるこの現代――「藍は生きものなのだから、育てることのできる環境の中に置いてやらねば。藍染をすることはイコール自然の生命と関わることです。その昔、日本人はどの民族よりも自然の懐ろ深くで生きて来ました。藍を自然発酵で染めることも、そんな暮らしの中にごく普通にあったのです。そういう背景を踏まえたなら、現代本当に藍染をやろうとする人は、その人自身の生き方も変えざるを得ないといえます。

それが藍への責任感であると思うし、そこからしか本当のものは生まれてこないと思います。美しい四季に恵まれ、穏やかな自然の中で独自な文化を育んできた我々日本人。この自然との深い繋がりこそが、もの創りをしていく上でのアイデンティティであり、また、そこに日本文化のオリジナリティが顕われくるのです。」

確固たる志を持って、もの創りをするということは、その人のライフ・スタイルを変え、その人の価値観、人生そのものまで大きく変える。谷原さんは「本当に藍染をやりたい人は山へ入って暮らすべき」という。「僕にとって藍染をするということは自然に身を委ねること。いいかえれば、自然が僕の作品制作の原点であり、発想の源なのです。ここに地獄建てにこだわる所以があります。誘い建てすればまだ充分建つ藍も、畑に埋め土に帰します。捨てるのなら欲しい、という人もいますが、絶対にあげない。これは藍の寿命なのです。むやみな延命治療はしません。」

この強いポリシーはすべてに貫かれている。谷原さんは手紡、手織の生地しか染めない。

「手紡ぎして手織した布は、空気を含んでいて藍の発色がよくてもいい。染めていって布に助けてもらう感じがする」という。

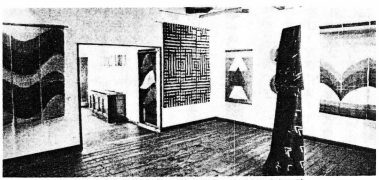
◆新鮮な感性

谷原さんが強く惹かれているのは、アフリカのプリミティブ・アート。

「シンプルで力強いデザインは総て木や貝や石など、自然から発想して染めているのです。昔の日本のデザインにも共通する新鮮さがあります。数百年の時間を経ても、はっとするほど新鮮。新しいものが必ずしも新鮮だとは限りません。感受性にぴん〳〵くる新鮮味こそが、僕の目指すものです。」

谷原さんのデザイン・ソースもまた、自然の中にある。

（編集部）



個展風景（松本市・ギャラリーKURAにて）



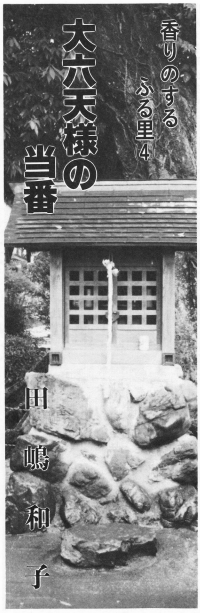
十一月二十三日大六天様の掃除当番がまわってきた。一年に一回ぐらいの割で地元の五、六軒づつのグループが順番制である。

西中学校の南の方向に位置する大六天神社は、神社といっても大きな社殿があるわけではなく、屋根のてっぺんが見えるぐらいの社である。大六天とは所在地の地名で、地元の守り神として古くから親しまれているという。

祭神らしきものは見受けられないが、短気で怒りっぽい神様だという伝説があるらしい。けなすと、その家に悪いことが起こったり、成功しないそうだから悪口は禁物である。「心しなさい」と、言われているような気がする。

年に一度の大祭は、四月二十九日に神主さんの祈願が行われる。昔は境内も広く、露店商が並んでにぎわったと聞いたが、現在はお参りに訪れる人もほんのわずかである。

ふだんは毎月二十六日が緑日とされている。これといった行事は何もないが、当日前までに掃除をすることになっている。班によってやり方は異なるが、私達の班は六軒で緑日に近い日曜日の朝、掃除をする。隣り近所の共同作業は近頃では数少ないコミュニケーションの場にもなり、けっこう楽しんでいる。家族のこと、健康のこと、おかずの話など話題にはこと欠かないひとときである。



社は、今から七年前に地元の人々の寄附金や協力者によって新しく建て替えられた。銅ぶき屋根のこじんまりとした社だが狭い境内のまん中にしっかりと腰をすえている。当時、建て替えることについては賛否両論で関係者の心労は並大抵のものではなかった、と、複雑ないきさつを近くのYさんから、ついこの間伺ったばかりである。

その社の扉を開けて、おさい銭をかぞえた。一円、五円、十円玉を合わせて三六四円入っていた。おさい銭は月によって違うが、毎月、毎日お参りしている参拝者もいると知り、せめて今日だけでも、あわてて手を合わせた。

以前はこのおさい銭で、リンゴやアメを買って供えていた。夕方になるとお供物を下げて、当番の人達で分け合って食べた。社が新しくなった頃からだろうか、おさい銭の処理の仕方が変った。当番が金額をノートへ記入し、その世話役を受け持っておられる、すぐそばのSさん宅へ預けるようになった。維持費として蓄えておこうというわけである。Sさんは日当りのいい縁側でノートを広げ、「たとえ少しでも年数がたつとバカにならない金額になりますよ」と、だいじそうにおさい銭を受け取っていた。

後は、社の中のほこりをていねいにふき取り、榊を取り替えて、水とお米をひとつまみあげる。草取りも手間はとらない。半時間もあれば、ほとんど終る仕事である。

大六天様といえば、大きな樫の樹は多くに知られ、目印にもなっている。小さな社を見守るかのように、おおらかにふんばり、そびえている姿は雄大である。この樫は白樫の老木で、大人が四―五人手をつないでも抱えきれないほどの太さになった。二階建ての家よりもさらに枝を伸ばし、たった一本の樹がこんもりとした森のように繁茂している。

また、この根元の西側にはぼこった根の間に、樹と向かい合うような型で二基の板碑が建っている。畠山重忠の墓と言い伝えられ、鎌倉期の貴重な青石塔婆である。樹の裏側に面しているので、お参りにきても見えにくく、見逃しやすいのがもったいない。

白樫と板碑は市の指定文化財になっているが、樫の成育とともに、年々石がうしろへ傾き、倒れかけている。掃除のたびに気になっているが、このままだと、やがて根っこの威勢に負けてしまう日もそう遠くない様子である。「頑張って」と、心の中で声をかけながら、樫の実を掃き寄せた。

大六天様はこうした環境に祀られ、歴史を重ねていく。この当番は、これからもずうっと受け継がれていくに違いない。

地元災難が少ないのも大六天様のおかげだという話は気安めでなく、信じていたい。





◉五月例会（㈬）
飯能の商人魂
講師　小川都次郎氏
※友の会共催
◉六月例会（総会・㈬）
記念講演
「伝説・記録・遺跡」
――歴史の調べ方――
講師　県立博物館副館長
吉川國男氏
◆郷土はんのう　第十三号発行
◉十月例会（㈬）
越生方面バスツアー
講師　吉田靖・岡野達雄氏
毛呂山町歴史民俗資料館・埼玉県平和資料館・岩殿観音・県立歴史資料館・全洞院（渋沢平九郎最後の地）・高麗神社等々。
◉十二月例会（㈬）
＊事後学習会
高麗神社の歴史
講師　吉田　靖氏
歴史散歩を振り返って
講師　岡野達雄氏
◉二月例会（㈬）
「飯能地方の和紙」
講師　郷土館長
浅見徳男氏
実技指導
小川和紙伝統工芸作家
久保春男氏

平成六年度の　お知らせ

●五月
飯能焼皇わかり
●六月
総会・記念講演
講師　栗原文蔵氏
（嵐山歴史資料館長）
「郷土はんのう」第十四号発行
●十月
歴史散歩
近くていける秩父案内
●十一月
秩父はどうでしたか？
●二月
わらの民俗教室
～わらじ・わら棒・しめなわを自分で作りませんか～
★本年度は、会員の皆様と郷土を楽しむことが目的です。静かにみえる町のあちこちに、店や文化財がひしめき合っている別のまち、趣の異なる〝秩父〟の研究はどうでしょうか！

新入会員紹介

佐藤みちよ（川寺三九五）
一川ひさ子（南町二一一四）
岡部米子（川寺三二九一八）
田嶋佐奈恵（双柳五七五・都築方）
梶川佳久子（芦刈場六六二）
横田岩雄（東町二五一一二）
浅井春恵（山手町二四一三三）
金山琴子（山手町二四一三三）
小倉国男（中藤上郷六一一〇）

▼ただいま、会員募集中！▲

当会では広く会員を募集しております。（特に若い方々の入会を歓迎します）
歴史・民俗等、興味のある方どうぞお気軽に事務局まで、お申し出下さい。
事務局は、飯能市郷土館内にあります。☎七二一四一四

「文化ともしび賞」受賞――。

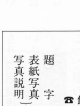
飯能郷土史研究会では、埼玉県が地道な文化活動をしている個人・団体を顕彰して贈る、平成五年度「文化ともしび賞」を受賞し、土屋知事より、表彰状とブロンズ像（左の写真）を戴きました。
これは、創立以来一貫して、郷土の歴史研究・講演会・勉強会などを行い、文化財保護思想の普及につとめたことが認められたのであり、表彰式には、井上会長が事務局代表で出席いたしました。
なお、前理事の島田欽一氏も短歌活動を通して地域文化に貢献したことから、受賞なされました。



訃報

横田稲吉氏
飯能郷土史研究会理事であられた先生は、郷土史研の他、各方面でご活躍され、「飯能市史」の編さんや「奥武蔵の植物」等出版も手がけられました。

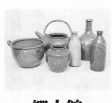
浅見　茂氏
原市場郷土史研の理事も兼ねられておられた浅見氏は、飯能郷土史研でもご活躍。若い人達の良き師でもあられ、郷土はんのうにも投稿いただいたり、原市場方面の研究に力を注いでおられました。
心よりご冥福をお祈りします。



※編集後記

開館五周年記念を迎えた飯能市郷土館では、特別展「飯能焼」が連日のにぎわいぶりです。バルコニーから見渡す緑色も移りゆくふる里を意識させてくれる。
早いもので当誌も来年は十五号。特集号を企画して、会員の方々、もちろん新入会員の方もまじえて、うれしい情報交換の場を作っていこうと考えております。
そして、忘れてはならない事務局のおかれた郷土館の皆様に心より感謝せねば……。（T）

郷土はんのう　第十四号
発行日　平成六年六月八日
発行所　飯能郷土史研究会
飯能市飯能二三八一一
飯能市郷土館内
☎〇四二九七二一四二四
題字　小谷野　寛一
表紙写真　井上　峰次
写真説明



郷土館の催し物

◉幕末・明治の幻陶　飯能焼
開催中、七月三日まで。
◉ジャパン・マイセン（仮称）
十月十五日～十二月十五日
（月曜日：休館）

原市場字東沢 竜崖山城跡現状図

作図・山影康洋

この図は県編「埼玉の城館跡」所載の実測図をもとに地元の伝承・赤沢の故宮見茂氏の御協力に基いて筆者が作製したものである 現在植林と崩壊のためかなり変形しているが保存状況は良好である
平成5年5月調査
同6年6月作製

北

腰曲輪というより大走りに近い幅2m位か 恐らく北側の崩落と平土の乾落を防ぐためであろう 北側は垂直に近い急斜面である

東沢方面

現在ではよくわからないが 張りだしていて上に櫓が建っていたのだろう 監視と堀に入った敵を攻撃する

腰曲輪

三曲輪は一曲輪と土橋(削り残しの通路)にもみえるが この山城ではそのような必要もないので考慮を要する

逆茂木(行き止まりの曲輪)

土塁

山頂なので当然だが 低く盛ったにのでなく削り残したようだ ここも急斜面なので北風を防ぐためにつくられたかもしれない

堅堀が崩落した所

土塁

坂切

一段高い

腰曲輪(二の曲輪)

約10m

約35m

崩落した跡

この辺建物跡か

約13m

約30m

一曲輪(本丸)
いちのくるわ(本城・東城ともいう)

井

小社・近年他所から移されたもの

この辺に戦時中まで「物見の松」とよばれる松の木があった 軍の命令で伐られたがあまりに大木であったため結局動かせず放置されてしまったという 恐らく城時代の見張かすれるので防ぐ「防槍柵」の一本であったのだろう

堅堀・崩壊が激しい

ここに木橋を渡したかもしれない

腰曲輪

櫓台

土塁突出ぐらいにして

東の大手口と意識して

北腰曲輪

堅堀北側へ廻り込む敵を防ぐ上部は小削平地だったか

(三曲輪)

柱穴の冠木門

土塁にどうしてこのように巡らしてあったのかはよくわからない

土塁突出ぐらいにして攻撃しやすくする

坂虎口(いわゆる大手口である)

堀底道

そのため南側にいささか曲輪が大走り状のものがかつてあったかもしれない

この辺相当急傾斜だが侵入を防ぐために

「逆茂木」や柵がおかれていたはずである

柵木は一間に付き5本位がよいという

堀切 先端が細くなってはっきりしない一の曲輪との連絡は木橋を渡したか土塁に切れ目がないためはっきりしない

堀切

横矢掛り

この間 約20m

現在の山道

本来城の大手道であったのだろう

かなり急勾配だがくらいジグザグに折れ道がついていたかとも思われる

堀切の先で赤沢側と要沢側の山道が合流する

腰曲輪

迎撃の第一段階・柵や木戸があったのだろう

堀切

ほとんど埋まっているがもとから浅い堀だったらしい

腰曲輪

この場所は防戦するよりも最先端として監視するものだったろう

堀切を含め城域を示す意味もあったかもしれない

切岸(城壁)

断ち切った岸状のもの

垂直近く削って侵入を困難にさせる

土塁

山頂なので当然だが 低く盛ったにのでなく削り残したようだ ここも急斜面なので北風を防ぐためにつくられたかもしれない

堅堀が崩落した所

腰曲輪というより大走りに近い幅2m位か 恐らく北側の崩落と平土の乾落を防ぐためであろう 北側は垂直に近い急斜面である

東沢方面

現在ではよくわからないが 張りだしていて上に櫓が建っていたのだろう 監視と堀に入った敵を攻撃する

腰曲輪

三曲輪は一曲輪と土橋(削り残しの通路)にもみえるが この山城ではそのような必要もないので考慮を要する

逆茂木(行き止まりの曲輪)

北

4

この図は県編「埼玉の城館跡」所載の実測図をもとに地元の伝承・赤沢の故宮見茂氏の御協力に基いて筆者が作製したものである 現在植林と崩壊のためかなり変形しているが保存状況は良好である
平成5年5月調査
同6年6月作製

土塁 山頂なので当然だが 低く盛ったにのでなく削り残したようだ ここも急斜面なので北風を防ぐためにつくられたかもしれない

堅堀が崩落した所

土塁

坂切

一段高い

腰曲輪(二の曲輪)

約10m

約35m

崩落した跡

約13m

約30m

一曲輪(本丸)
いちのくるわ(本城・東城ともいう)

井

小社・近年他所から移されたもの

この辺に戦時中まで「物見の松」とよばれる松の木があった 軍の命令で伐られたがあまりに大木であったため結局動かせず放置されてしまったという 恐らく城時代の見張かすれるので防ぐ「防槍柵」の一本であったのだろう

堅堀・崩壊が激しい

ここに木橋を渡したかもしれない

腰曲輪

櫓台

土塁突出ぐらいにして

東の大手口と意識して

北腰曲輪

堅堀北側へ廻り込む敵を防ぐ上部は小削平地だったか

(三曲輪)

柱穴の冠木門

土塁にどうしてこのように巡らしてあったのかはよくわからない

土塁突出ぐらいにして攻撃しやすくする

坂虎口(いわゆる大手口である)

堀底道

そのため南側にいささか曲輪が大走り状のものがかつてあったかもしれない

この辺相当急傾斜だが侵入を防ぐために

「逆茂木」や柵がおかれていたはずである

柵木は一間に付き5本位がよいという

堀切 先端が細くなってはっきりしない一の曲輪との連絡は木橋を渡したか土塁に切れ目がないためはっきりしない

堀切

横矢掛り

この間 約20m

現在の山道

本来城の大手道であったのだろう

かなり急勾配だがくらいジグザグに折れ道がついていたかとも思われる

堀切の先で赤沢側と要沢側の山道が合流する

腰曲輪

迎撃の第一段階・柵や木戸があったのだろう

堀切

ほとんど埋まっているがもとから浅い堀だったらしい

腰曲輪

この場所は防戦するよりも最先端として監視するものだったろう

堀切を含め城域を示す意味もあったかもしれない

切岸(城壁)

断ち切った岸状のもの

垂直近く削って侵入を困難にさせる

腰曲輪

やや ゆるやかな南西部に対しての警戒柵をめぐらした程度であったろう

堀状 崩れたくぼんだ?)跡かでもなさそうだ ごくいささかもの

この方面にも登り道らしいものがあるが近世のものであろう

赤沢方面